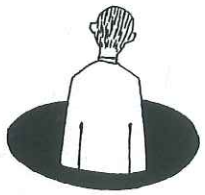
僕たちは「濃淡のある領域」にいる

――岩波明『心に狂いが生じるとき　精神科医の症例報告』

森　達　也



ヴィンセント・ヴァン・ゴッホの精神疾患についての記述から本書は始まる。そしてやはり、ゴッホについての記述の補足で本書は終わる。

入り口（はじめに）と出口（おわりに）に配置されたヴィンセント・ヴァン・ゴッホ。彼がその37年間の貧しく苦しい生涯で抱え続けた狂気と、それゆえに産み出された優れた創作について記しながら、岩波はふと、吐息を洩らすかのようにつぶやく。

「正常な精神と狂気には、厳然とした境界線があるように考えられている。しかし実際のところその境い目は、ごく淡いものであるように思われる」

このフレーズはまさしく本書の基調低音だ。入り口の扉を開けた読者は、岩波が先導する精神の病や傾斜の実例を見聞きする旅に誘われる。これもやはり、辛く苦しい旅だ。さまざまな症例と、それによってもたらされる本人や家族の苦痛、悲しみ、憎悪。絶望。そして諦め。そんな旅を続けながら、僕は時おり、前を歩く岩波のつぶやきを耳にする。

この境界は濃密な線分ではなく濃淡のある領域なのだ。黒か白かではない。正常か狂気かでもない。善か悪かでもない。僕もあなたも（そしてもちろん岩波自身も）、この領域の中にいる。ふとしたはずみでこの濃淡が変わる。この領域を僕たちはたゆとうている。彼らは彼岸の人ではない。僕たち自身の姿でもある。

昨年末から今年にかけて、僕は二人の親しい友人を自殺で失った。一人は自室で首をつり、一人は団地の階段の踊り場から身を投げた。

岩波によれば、平成17年度のうつ病（気分障害）患者の総数は110万5800人。平成8年のおよそ二倍。急激に増えている。そしてこの急激な増加は、この国における自殺者急増と、ほぼパラレルな曲線を示している。

自殺した友人は共にうつ病だった。一人はここ数年、精神科医院への入退院をくりかえしていた。ふたりとも発症したきっかけはたわいない。葬儀に集まった友人たちは（僕も含めて）、なぜ相談してくれなかったのかと身をよじった。

でも彼らはそれを選択しなかった。とても深い絶望の淵にいた。「なぜそんなことで」と生き残った僕たちは口にする。でも彼らにとっては「そんなことで」はなかったのだ。彼らが彼岸にいると思うから「そんなこと」と僕らは嘆息し、時には吐き捨てる。彼岸ではない。すぐ横にいた。僕はそれに気づかなかった。思い至らなかった。だから悔しい。

この国は異端を排除する。徹底して排除する。そしてKY（空気読めない）というフレーズが流行するという近年の現象が示すように、この傾向はますます強くなっている。

「日本人は集団から逸脱した意見を持つものを好まないし、群れから離れた存在を無視する。さらに集団で徹底的に痛めつけ、精神的に追い詰めることにも容赦がない」

岩波のこの文章に、僕が付け加えるべきことなど何もない。だからこそこの国の人たちは、あれほどに無謀な戦争に駆り立てられると同時に、敗戦後たった十数年で、国民総生産世界第二位への復興という奇跡を成し遂げた。

群れの力は強い。でも個は弱い。一人ひとりの個は優しい。でも群れとなると例えようなく酷薄になる。

そんな国でもうすぐ裁判員制度が始まる。いわゆる凶悪事件のかなりの割合が、精神を病んだ人による他害行為で占められている。ならば犯罪者（集団から逸脱したもの）に対して酷薄なこの社会は、彼らの犯罪をどう裁くのだろうか。

岩波はもちろん、この視点からの考察も外さない。第七章「精神鑑定の嘘」は、刑事司法における精神鑑定というジャンルの内部告発でもある。専門家による専門領域への貴重な提言だ。

読みながら改めて気づく。専門領域だけど遠い世界の話ではない。すぐ身近にある話なのだと。決して他人事ではないのだと。

（もり・たつや　映画監督・作家）

岩波明『心に狂いが生じるとき　精神科医の症例報告』
978-4-10-470103-2 発売中

日本ミステリー小説揺籃期の名探偵、法医学博士・呉田秀雄、100年の時を超えて初の完全集成！
探偵奇譚
呉田博士
三津木春影 末國善己編
【完全版】
【限定1000部】
＊7140円
付「三津木春影『呉田博士』とその時代」
江戸川乱歩、横溝正史、野村胡堂らが愛読した、オースティン・フリーマン「ソーンダイク博士」シリーズ、コナン・ドイル「シャーロック・ホームズ」シリーズの鮮烈な翻案。
【限定1000部シリーズ好評既刊】
野村胡堂 探偵小説全集 ＊7140円
国枝史郎 歴史小説傑作選 ＊7140円
国枝史郎 伝奇短篇小説集成 全二巻 ＊各7140円
国枝史郎 伝奇浪漫小説集成 ＊7140円
作品社
千代田区飯田橋2-7-4/価税込
TEL3262-9753 電話にて宅配可
自費出版のご相談は［作品企画］まで